ガンダムSEED 交わった世界

カルラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ガンダムＳＥＥＤ　交わった世界

【Ｎコード】
Ｎ７６９６Ｙ

【作者名】
カルラ

【あらすじ】
Ｃ．Ｅ．７１　Ｌ３コロニー『ヘリオポリス』にて地球軍による新たなプロジェクト、その名も『Ｇ』計画。新型ＭＳ．　５機と新型戦艦を開発されていた。だが、ある組織にこの情報は漏れていた。コーディネイターとナチュラル、２つの人類。悲しい歴史は終わりを告げない。
今此処に新たな物語、少年達をも巻き込む戦争が始まろうとしている。
この作品はガンダムＷ×ガンダムＳＥＥＤのクロス小説です。

なお、ガンダムのパイロット五人組は１６歳設定です。

プロローグ（前書き）

物語の序章です。
初めてですが、頑張ります（o＜ω＞o）

プロローグ

ある一機のシャトルの中

??「なぁ、本当にあの情報はあってるんだろうな?」
××「……」
??「無視するな!!」
長いおさげ髪を揺らしながら黒い服を着た少年が言う。
××「…、うるさい。聞こえている…」
凍てつく瞳の少年が反論する。
??「本当に、L3コロニーでMS開発が行われているのかよ?」
××「あぁ、間違いない。この小火は早急に消し去るぞ、デュオ」
??「分かってる、ヒイロ」
デュオ「あの悲しい歴史は繰り返したくねぇもんなぁ…」

プロローグ（後書き）

さて、今後どうなるやら…

キャラクター設定　～ガンダムW～　↑12／18追加（前書き）

ガンダムWメンバーの設定ですっ！！

キャラクター設定　～ガンダムW～　↑12／18追加

ヒイロ・ユイ

年齢…16歳

所属…ブリベンター『エンジェル』

搭乗機体…ウィングガンダムゼロカスタム

元ガンダムパイロットのひとり。無口で無愛想と思われがちだが優しい心の持ち主。リリーナを守る事が彼の最優先任務らしい。デュオ曰く「ぞっこん」

デュオ・マックスウェル

年齢…16歳

所属…ブリベンター『デス』

搭乗機体…ガンダムデスサイズヘルカスタム

ヒイロと同じく元ガンダムパイロット。自ら死神と名乗る陽気な少年。長いブラウンの三つ編みとコバルトブルーの瞳がトレードマーク。ヒイロとコンビで任務をする事が多いことがこの頃の悩みの種。

トロワ・バートン

年齢…１６歳

所属…ブリベンター『ピエロ』

搭乗機体…ガンダムヘビーアームズ改

ヒイロと同じく元ガンダムパイロット。顔の半分を覆っている長いブラウンの髪が特徴的である。普段はサーカス団のピエロをやっている。

張　五飛

年齢…１６歳

所属…ブリベンター『ナタク』

搭乗機体…アルトロンガンダム

元ガンダムパイロットのひとりで『マリーメイアの反乱』時はヒイロらの敵となり立ちはだかった、漆黒の髪と瞳を持つ中国人。

ＥＷ版が終わった直後の設定。
（にもかかわらず、ガンダムは自爆していない）

カトル辺りが『宇宙の心がっ～～～』等と言って自爆を反対したということにしてください。

他のメンバーは登場後に載せます♪

キャラクター設定　～ガンダムW～　↑12／18追加（後書き）

マリーメイアの反乱　〔12月27日〕

←　←　←

『ヘリオポリス』奇襲　〔1月25日〕

いわゆる『ス●●ボ』みたいな世界観です…（笑）

キャラクター設定　～ガンダムＳＥＥＤ～（前書き）

此方は地球軍のメンバーを載せています。

キャラクター設定　～ガンダムＳＥＥＤ～

キラ・ヤマト

年齢…１６歳

搭乗機体…ストライクガンダム

Ｌ３コロニー『ヘリオポリス』に住む工業カレッジの学生。コーディネイターで茶髪と紫色の瞳を持つ少年。ガンダム奪取作戦に巻き込まれ、「ストライクガンダム」のパイロットとなる。

トール・ケニーヒ

年齢…１６歳

『ヘリオポリス』に住む工業カレッジに通うナチュラルの少年。キラとは同じゼミ仲間。　キラがコーディネイターであることを知る人物であり、いちばんの理解者。

ミリアリア・ハウ

年齢…１６歳

キラの友人でキラがコーディネイターであることを知っているナチ

ュラルの少女。トールとは恋人の関係である。

サイ・アーガイル

年齢…17歳

『ヘリオポリス』の工業カレッジに通うナチュラルの学生。他のメンバーよりひとつ年上でしっかりもの。

カズイ・バスカーク

年齢…16歳

工業カレッジに通う学生でキラの同級生のナチュラルの少年。内気な性格で時折、コーディネイターであるキラに対して複雑な心境を見せる。

マリュー・ラミアス

年齢…26歳

所属…地球連合軍第2宙域第5特務師団

階級…大尉

『G』計画に参加し開発中にザフト軍の奪取作戦に遭遇する。避難していたキラを『ストライク』に連れ込んだ女性。

ムウ・ラ・フラガ

年齢…28歳

所属…地球連合軍第7軌道艦隊

階級…大尉

MA(モビルアーマー)『メビウス“ゼロ”』のエースパイロット。ザフト軍のラウ・ル・クルーゼとは何か因縁があるらしい…。別名【エンデミオンの鷹】

キャラクター設定　～ガンダムＳＥＥＤ～　その２（前書き）

こちらはザフト軍です

キャラクター設定　～ガンダムSEED～　その2

アスラン・ザラ

年齢…16歳

配属…ザフト軍クルーゼ隊

搭乗機体…イージスガンダム

赤服を着るエースパイロットの1人。キラとは13歳の時まで共に育った幼馴染み。母親を、【血のバレンタイン】で亡くしている。また、婚約者のラクス・クラインに手作りのペット型ロボット【ハロ】をプレゼントするという1面もある。

イザーク・ジュール

年齢…17歳

配属…ザフト軍クルーゼ隊

搭乗機体…デュエルガンダム

アスランをライバル視する同期のパイロット。エースの証である赤服を着ている。

ディアッカ・エルスマン

年齢…17歳
配属…ザフト軍クルーゼ隊
搭乗機体…バスターガンダム
イザーク同様アスランをライバル視する同期のパイロットで赤服を着ている。

ニコル・アマルフィ
年齢…15歳
配属…ザフト軍クルーゼ隊
搭乗機体…ブリッツガンダム
クルーゼ隊に所属する赤服のエースパイロット。まだ、幼さが残る温厚的な顔。ピアノを弾くことが得意な少年。

ミゲル・アイマン
配属…ザフト軍クルーゼ隊
搭乗機体…ジン
パーソナルカラー【オレンジ】
アスランたちよりも2期上。一般兵を示す緑の軍服を着ているが、

赤服に匹敵するほどの腕前。【黄昏の弾球】の異名を持ち、自分専用のジンを保有している。

ラウ・ル・クルーゼ

配属…ザフト軍クルーゼ隊隊長

搭乗機体…シグー

アスランたちが所属するクルーゼ隊の隊長。顔の半分が銀色のマスクで覆われており、謎の多い男である。ムウとは何か因縁があるらしい…

第1話　平和な時間（前書き）

ついに主人公の1人登場っ！！

第1話　平和な時間

L3コロニー『ヘリオポリス』内―――
まだ、幼さの残る茶髪の日本人系の少年の肩に小型ペットロボットが舞い降りる。
〔トリィー〕
少年―キラ・ヤマトは『トリィ』をくれた少年を思い出す。
「アスラン…」
緑色の瞳、年齢よりも大人びた口調。
―キラもそのうちプラントに来るんだろ？―

「おーい、キラ」
少年の声が聞こえる。
キラはその少年の名前を呼ぶ。
「トール、それにミリィも…」
トール・ケーニヒとその恋人ミリアリア・ハウ。同じゼミの仲間だ。
「どうしたの？」
「『どうしたの？』じゃねぇよ！！カトウ教授がお前を探してたぞ」
「きっと追加の課題ね♪」
ミリアリアがウィンクしながら言った。
「うえェ～　まだ、渡された課題、終わってないのに…　あの鬼教授」

「楽しい会話中だけどちょっといいかい？」

「「「えっ！？」」」
聞いたことのない声だった。

そちらを向くと、少年が2人。
1人は長いおさげ髪に黒い服を着ている。そしてもう1人は凍てつく瞳に緑色のタンクトップとジーパンを着ていた。黒い服の少年が言う。
「お前ら、ここのゼミの学生か？」
「そうですけど…」
「ふーん、じゃあカトウ教授がどこに居るか知ってるか？」
これも黒い服の少年だ。
もう1人の少年は静かに会話を聞いている。
「教授なら、『モルゲンレーテ』の方に居ると思いますけど…、何か用ですか？」
「いや、ありがとな！」
そこで彼らは踵を返し歩き出した。
「何者だ？あいつら…、見たことない顔だけど」
「ほかのコロニーの学生かしら？」

「やっぱり、黒だったな、このコロニー」
「あぁ、念のためモルゲンレーテの方も調べておくぞ…」
「OK」

第2話　偽りの平和（前書き）

少々、長くなりました……

第2話　偽りの平和

ゼミの一室――――

目的地のドアを開けると2人の少年がいた。
「あっ、やっと来た…」
「全く、今まで何してたんだ？」
前者はカズイ・バスカーク。後者はサイ・アーガイル。
2人ともトールと同じゼミの仲間だ。
「ごめん、遅れた…」
「あれ？教授は？」
「なんか用事が出来たからどっか行った。それと、はい」
カズイが何かを差し出す。
それは――――

「はぁー、まだ終わってないのに、追加が…」
「頑張れ、キラ」
トールが肩をたたく。
ふと視線を感じそちらを向くと、少年が居た。
「彼は？」
「あぁ、教授のお客さん」
「教授の？……、あっ、そういえばこっちに少年が2人来なかったか？」
「え？……来てないけど」
トールの質問にサイが答え、カズイも首をふる。
「まじ？じゃああいつら、何だったんだ？」

その瞬間――――
鼓膜を破るような音が地鳴りと共に襲った。

「なっ、何だ！？」
「爆発！？」
「隕石かっ！？」
その時、ゼミの大人が言った。
「ザフトに攻撃されている」
「コロニーにモビルスーツ（ＭＳ）が入って来てるんだよっ！！」
それを聞いた瞬間、教授のお客さんである少年が急に動き出した。
「あっ、君」
少年は銃声の聞こえる方に向かって行く。
あわてて、彼の腕を掴む。
細い腕だった。
「っ！！離せッ！！」
「何言ってるの？それよりも早く避難しないとっ」

急に爆風が吹いた――
風が彼の帽子をさらい、彼の髪が顕になった
その長い金髪が目に映る。

「お……おんなの……子？」

「何だと思っていたんだ？今まで…」
少年――いや、少女が言った。
「いや……その……」
「お前は早く避難しろ！！」
「えっ……、君は？」
「私には確めなければならないことがある」
そう言うとまた銃声の聞こえる方に向かおうとする。
後ろを向くと、来た道は瓦礫で戻ることなどできない。
「そんなことよりも避難しないとっ！！」
「あっ！！お…おいっ！！」
僕は彼女の腕を引き、シェルターを探す。
急にか細い声が後ろから聞こえた。
「こんなことになってはと、私は、私は……」
暗い通路の先に光が見えた。
僕はそれを目指して走る。
光が眩しくて立ち止まった瞬間っ――――

そこは、戦場だった。

銃声と銃声が響きあい、次第に音が大きくなる。

聴覚がおかしくなるぐらいに……

すると、彼女は何かを見つけその場に座り込む。
その視線の先には、鋼鉄の何かがあった…

「地球軍の新型機動兵器……、お父様の……

お父様の裏切り者ぉぉぉぉぉッ！！」

彼女の声を聞き、何者かが銃を向ける。
「こ……子ども？」
黒光りする銃口が此方を向いている。

此処に居たら、撃たれる。
僕はとっさに思った。
早く此処から離れないと。
「泣いてちゃダメだよっ！！ほら、走って！！」
僕たちは再び走る。
角を曲がると、シェルターが見えた。
「ほら、此処に避難してる人がいるよ」
よっぽど、さっきのことが衝撃的だったのだろう…
さっきからずっと黙ってる。
スピーカーから声がする。

〔まだ、誰か居るのか！？〕
「はい！僕と友達もお願いします！！開けてください」
〔２人！？もう此処は一杯なんだっ！！
左ブロックに３７シェルターがあるがそこまで行けんか！？〕
そちらの方を見る限り、簡単には行けそうもない…
「なら１人だけでもっ！お願いします！！女の子なんです！！」
〔わかった…、すまん〕
同時にドアが開く。
「入って……」
だが、彼女は無言だ。
僕は無理やり彼女を押し込む。
「何を！？私はッ――」
「いいから入れ！僕は向こうに行く。大丈夫だから！早く入って！！」
「待てッ！！お前ッ――――」
そのままドアを閉め、走り出す。

さっきの銃を向けた女性がまだそこにいた。
そして、その女性を狙う一つの銃口――――
僕はとっさに叫んだ。

「危ないッ！！後ろ！！」

「！！」

その声を聞き、女性はとっさに後ろを向き、自分を狙っていたザフト兵を撃つ。
自分の危機を知らせた声の主を見ると、

「……さっきの子？なんで！？」
女性が叫ぶ。
「来いッ！！」
「左ブロックのシェルターに行きます。お構い無く」だが、彼女の言葉は衝撃的だった。
「あそこはもうドアしかないッ！！」
「えっ……」
「こっちへッ！！」
僕は意志を決め、２階から１階に飛び降りた。

激しい銃の撃ち合いの中で、１発の弾が赤いパイロットスーツのザフト兵に命中する。

「っあ！！」
「ラスティッ！！くっ！！」

仲間を殺されたもう１人のザフト兵が、発砲する。
その弾が１人の男を襲う。

「うぐっ……」
「ハナマッ！！」

仲間が撃たれたのだろう、彼女が赤のザフトパイロットに射撃する。
ザフト兵もそれに応戦する。

だが、相手はコーディネイターだ。結果は誰でも分かる。
「あぁぁッ―」
女性は被弾した。
ザフト兵の銃は弾詰まりしたのだろう。
銃を捨て、ナイフを持ち変えた。
僕はとっさに彼女の前に出る。

ザフト兵のバイザー越しに相手の顔が見えた……

緑の瞳、青い髪――その顔は一時も忘れたこともない大切な友達。
気がついたら口からその名がこぼれていた。

「アス……、ラン？」

「キ……キラ！？」

彼からも自分の名前が聞こえた。
声変わりをしているが、紛れもない大切な親友、アスラン・ザラだった…

第2話　偽りの平和（後書き）

誤字、脱字やアドバイス等お待ちしています！！

第3話　天使と死神（前書き）

ちょっとオリジナルを加えてみました

第3話　天使と死神

同時刻――
『ヘリオポリス』モルゲンレーテ付近――

「ザフトのＭＳだとっ！？」
「『ここ』は中立の筈だぞ！？」
避難する人々の波に逆らう人影が２つ……。
「おい、ヒイロ。相棒たちを連れて来て、正解だったな…」
「あぁ…」
「にしても、『ザフト』さんも派手なやり方するなぁ～」
「無駄口をたたく隙があるなら足を動かせ……」
「ヘイヘイ……」
彼らが向かう先、そこは――

「もう一度一緒に暴れようぜ、相棒ぅ」
「……」

工場の中でひっそりと立っている鋼鉄の巨人――ガンダムが彼らを待っていた。
手慣れた手つきで起動させる。
「どうする？ヒイロ。敵を全滅させるか？」
「いや、武装解除させる…」
「りょーかいッ！！さ～て、死神が戦場に舞い戻って来たぜぇ～！！」

工場の屋根を破り、２つの巨人が立ち上がる。
〔敵ＭＳは……３って、結構少ないなぁ～〕
「おそらく、別部隊がいるんだろう……」
〔ってことは、あいつらも『アレ』が狙いか…〕
こちらの存在に気付いたのだろう、敵ＭＳ――ジン三機がこちらを向く。
バーニアを吹かし、突進してくる。
ヒイロが乗るウィングガンダムゼロは、素早く舞い上がる。
デュオが乗るガンダムデスサイズヘルカスタムは、ハイパージャマーを起動させる。二機の突然な動きにジン三機は立ち止まる。その内の一機に忍び寄る、不穏な影……
死神――ガンダムデスサイズヘルカスタムが大鎌の形をしたビームシザースを振り下ろしジンの頭部と右腕を引きちぎる。
〔いっ……いつの間に！？〕
〔チッ！お前は一端離脱しろ！！〕
〔クッ！すまない……〕
しかし、一羽の天使が別の一機目掛けて急降下する。
そして、そのままビームサーベルで両足を分離させる。
その姿はまさに【告死天使】であった。
〔はっ……速い！？〕
〔ナチュラルごときが……、離脱するっ〕

だが次の瞬間、巨大な爆発音がコロニー中に響き渡った――

両者は爆心地の方を向く。
〔ッ……！？〕
〔あれが隊長が言っていた…〕

彼らが見たもの、それは――

「奪取されたか……」

〔しくったぜッ……〕

額にV字アンテナを持つ鋼鉄の巨人――――――ガンダムが三機、起動していた。

〔流石ザフト、お手が早い……、情報を当てにすると、後二機残っているはずだっけ？〕

「あぁ……」

三機はこちらに目もくれずコロニーから脱出していく。

が、次の瞬間、残りの二機も立ち上がる。

だが、片方の機体の動きはぎこちない……

〔……、まさかあの機体〕

最後の一機のジンがぎこちない動きの機体に攻めこむ。

仲間から知らされたのだろう……

乗っているパイロットが

ナチュラルであると……

機体のパイロットも己の危機に気付いたのだろう、向きを変えた瞬間、灰色だった機体に鮮やかな色が浮き出る。
〔あれが例の『フェイズシフト』ね……〕
赤い機体は離脱する。
白い機体は必死に防御する。
だが強度の高い機体でも、同じ場所を攻められては、長くは持つまい……
ジンがこれで決めると動きを止めた瞬間、機体――ガンダムがさっきまでとは別人の動きでジンに体当たりする。
バルカンを用いて敵との距離を作る。

〔まさか、あのパイロット、調整してるのか！？〕
「おそらく、そのまさかだろう……」
〔ありえねぇ……〕
「確かにナチュラルでは無理だろうな……」
〔ってことは、ヒイロ〕
「あぁ」

ガンダムはナイフのような武器を取り出し、ジンのコックピット付近に攻撃する。
ジンのパイロットは機体を捨てて、脱出した。
2機の戦闘を見ていたデュオが口を開く。
〔あの機体どうする？ヒイロ〕
「……、あのパイロットに接触する」

〔そうこなくちゃな！！〕

第3話　天使と死神（後書き）

感想お待ちしています！

第４話　ＧＡＮＤＡＭ（前書き）

オリジナルを少し入れるだけでも難しいです…（｜｜；）

第４話　ＧＡＮＤＡＭ

「はぁはぁ……」
緊張の糸が途切れたのか、少年はシートに身体を預ける。
そして、先ほどのザフトパイロットを思い出す。
（あの顔……、確かにアスランだった。でも、なんでアスランが『ザフト』にいるんだ？戦争は嫌いだって言ってたのに…）
そう思いながら、少年――キラ・ヤマトは後ろで気絶している女性を見る。
戦場に居たキラをこの巨人の中に連れ込んだ人だ。
いや、押し込んだの方が正しいかもしれない…
モニターでこの機体の足元を見る。
そこにはゼミの仲間達が居た。
機体の膝を折り、コックピットから顔出す。
「キ……、キラ！？何でそんな所にいるんだよ？！」
「トール、サイ、この中に気絶している人がいるんだ。怪我もして僕一人じゃ降りることも出来なくて…」
「わかった、とりあえずもう少し下げてくれっ」
「あ…、うん」

その後、彼らの助けもあって、なんとか地上に降りることができた。

サイが女性を見ながら聞いてくる。
「なんであんなものに乗っていたんだ？」
「あの子を追っていたら戦闘に巻き込まれて、あの女性に乗せられ

たんだ……」
そこにトールが疑問を投げかける。
「でもなんで中立の『ヘリオポリス』でＭＳが造られてんだ？」
急に、聞きなれない声が僕たちの後ろから聞こえた。
「その疑問、答えを教えてやろうか？」
その場に居た全員が声のする方を見る。
サイとカズイにとって見たことがない人物だが、キラとトール、そしてミリアリアにはまだ記憶に新しい人物。
「君は……あの時の」
長いみつあみに黒い服を着た人物。
カトウ教授の居場所を聞いてきたあの少年だった。
もちろん、凍てつく瞳の少年もいる。
「よぅ！また会ったな、兄ちゃんたち」
「君は、……一体誰なの？」
「俺？俺は……、……ヒイロ！ヒイロ・ユイ、ちょっと物知りのジャンク屋さ！！
んで、こっちの目付きの悪ぃ奴は知り合いの」
「……デュオ・マックスウェルだ」
凍てつく瞳の少年が言う。
黒い服の少年――ヒイロが問う。
「お前の名前は？」
「…キラ、キラ・ヤマト」
「ふ～ん、お前あのＭＳに乗って戦ってたろ？」
キラはヒイロを探るような目で逆に問い返す。
「もし、違ってたら？」
だが、ヒイロは不敵な笑いを浮かべながら言った。

「お前さぁ……

コーディネイターだろ？」

その言葉にその場の空気が凍った…

キラは信じられなかった。

「な、なんで……？」

「悪ぃが、さっきの戦闘をみさせてもらった。

初めて乗ったＭＳでの戦闘、ＯＳを戦闘中に調整、そしてザフトを

見事に返り討ちした。」

３本の指を立てながら、ヒイロは言う。

「どれも、ただのナチュラルには無理だからな…」

ヒイロの言葉に続き凍てつく瞳の少年――デュオが

「安心しろ、別にお前を捕まえるわけではない…」

「そうそう、ただ知りたかっただけさ！！」

「うっ……」

どうやら、気を失っていた女性が目を覚ましたようだ。

ミリアリアがゆっくりと問う。

「大丈夫ですか？」

「えぇ、……ッ！！あの機体はッ！？」

女性はキラを見つけると、尋ねる。

「あの機体は……？」

「あそこに…」

キラは指をさし、ある場所を教える。

「良かっ…ｔ「最後の一体まで無くなっちまったらやべぇもんなぁ

？」ッ！？何故その事を！！」
女性の言葉を遮るように言ったのはヒイロだった。

「さぁ～ね？名前を名乗んない奴に答える気はさらさらないね！」
「……、マリュー・ラミアスよ」
「『地球軍の』だろ？」
女性…いや、マリューはヒイロを睨む。
「あなたたち、一体どこまで知ってるの！？」
「答える義務はないね！」
するとマリューは懐から――

「おいおい、ガキに向かって拳銃を向けるなよ…」
黒光りする銃口に僕らは言葉を失う。
「戦争をしているのよ、大人も子供も関係ないわ！！」
だが、ヒイロは拳銃を向けられても、驚きもしない。
そこにトールが割り込む。
「待ってくれよ！『ヘリオポリス』は中立。戦争には関係無いだろッ！！」

1発の乾いた音がした――

マリューが持つ拳銃からは煙が立ち上る。
だが、銃口は上を向いている。
それでも、戦争とは無関係に育ってきたキラたちは驚愕の瞳でマリューを見つめる。
「黙りなさいッ！！なにも知らない子供が！！『中立』だ、無関係だ、そんなことを言っていれば、まだ無関係でいられると思ってい

るの！？」
視界の端でデュオが動いた気がした――――
再び、銃声がこの場に響き、拳銃が空中を舞う。

「っ！！……」

マリューの拳銃を撃ち落とした者を目で探す。
まだ煙が立ち上る拳銃をマリューに突きつけているデュオがいた。
「何故驚く？お前は言った筈だ。『戦争をしている』と、『大人も子供も関係無い』と」
凍てつく瞳のまま続ける。
「ならば、子供が銃をもっていても、大差ない」
そこにヒイロが割り込む。
「さてと、このまま此処に居ると、コロニーと運命を共にしちまう。何処か安全な場所は無いのかよ、地球軍さん？」
マリューはキラの方を向き、
「あなた……、名前は？」
「キラ・ヤマトです」
「そう、じゃあキラ君、あの機体に乗って通信してほしいの…」
「何処にですか……？」
「それは…」

彼女が言いかけた時、何処かで警告音が鳴った。

「なにっ！？」

しかし、その音が何を知らせているのか、キラたちには、わからなかった。
2人だけ、理解している者がいた。
「行くぞ…」
「OK！！きっちりと相手してやろうじゃねぇか！！」
デュオとヒイロが謎の言葉を残し、踵を返す。
「何処に行くの？」
キラが問う。
「MSに初めて乗った奴は此処で観てな！！ベテランの戦いを観してやるよ」
ヒイロはそう言いながら、何かのスイッチを押す。
すると、何も無かった空間に鋼鉄の巨人が2体、現れた。
「ガン、ダ…ム？」
それは先程、キラが乗っていた機体――ガンダムに酷似していた。

第４話　ＧＡＮＤＡＭ（後書き）

現在の状況

ヒイロ→デュオ
デュオ→ヒイロ

と、名乗っています。

５０pt突破！！（前書き）

作者から読者への感謝の気持ちです

５０pt突破！！

キラ）あれ？此処どこ！？
ヒイロ）……
キラ）ヒイロいたの！？（；　゜Д゜）
デュオ）俺、参上ッ！！
キラ）えっ？えっ！？（□；）！！
ヒイロ）うるさいぞ、デュオ
デュオ）ったく、いいだろう少しぐらい浮かれたりしても…
ヒイロ）一番浮かれているのは、あの馬鹿だがな…
カルラ）５０pt突破！
　　お母さん、産んでくれてありがとぉーーーー！！
キラ）そんなに嬉しいの？
カルラ）もちろん、まさか私の駄作を気に入る人なんて居ないと思ってたからね♪
デュオ）なら、何で載せたんだ？
カルラ）ノリッ！！
ヒイロ）死ね
カルラ）（□ーーーー！！
　　いいもん…、今すぐヒー君にネコミミ&しっぽ＋執事服を着せて『おかえりなさいませ、お嬢様♪』みたいな感じのイラスト書いてやるんだから…
ヒイロ）なっ！？
キラ）ね…、ネコミミ…？
デュオ）執事服ぅ！？

カルラ）準備、準備♪

ヒイロ）アカシック…

カルラ）ん（　—|・）？

ヒイロ？）バスタアアアアアアアッ———————!!

カルラ）えええええええええぇぇぇぇぇッ!!（　；　。д。）

キランッ!!☆≡

キラ）作者、☆になったけど…（汗）

デュオ）気にすんな!!そのうち帰って来るさッ!!

キラ）そういうものなの？

ヒイロ）全く、あの駄作者は……、ブツブツッ―

キラ）……さっきのヒイロ、見事にキャラ崩壊してた気がする……

デュオ）はぁ？中の人だろ…

キラ）えっと、作者からの伝言です。

「へたくそですが、一生懸命頑張りますので今後もよろしくお願いします」

カルラ↑復活）お気に入り登録してくださり、本当にありがとうございます♪

次回からも見てくださいますと光栄です。

50pt突破！！（後書き）

●ン）俺の出番は？
カルラ）さぁ？

●ン）あんたって、

人はアアアアアッ――――――――（血涙）

～おまけ～

キラ）あれ？あの話は？
カルラ）『あれ』は「彼」が出てきてからね♪

第5話　巻き込まれた少年（前書き）

戦闘シーンは書くのが難しいです。

第5話　巻き込まれた少年

「そんな、ありえないわ…」
女性――マリュー・ラミアスは目の前の2機の巨人の存在を受け入れることが出来なかった。
今回のプロジェクト、『G』計画で開発されたMSは全部で5機のはず…
間違いない、自分もこの計画に参加したのだから…
では何故？

●

キラは何もない空間から現れた2機を見ていた。
1機は、白い4枚の翼を持っている。
その姿から連想されるもの――そう、神々しい天使のようだった。
もう1機は、黒いボディ、コウモリのような黒い翼、まるで――
「あく…ま」
その言葉を呟くだけで寒気がする。
黒い機体には、黒い服の少年…ヒイロが、白い機体には、凍てつく瞳の少年…デュオが、それぞれ乗り込む。巨人たちが目をさましザフトのMS『ジン』に立ち向かっていく。

11対2
そのうちの1機はジンとは少し違う武装。
圧倒的にヒイロたちの不利なのがわかる。
負ける――――
僕はそう思った、いや確信した。

ザフト兵は、遺伝子を調整した者たち、『コーディネイター』で構成されている。
無論、訓練も受けているのだろう。
そんな彼らに勝てるわけがない、と思ったからだ。

だが、

「ウソだろ…、相手はあの『ザフト』だぞ…」
サイの呟きが聞こえた。

信じられなかった。
相手はあの『ザフト』。
にもかかわらず、彼らは巧みな技術でジンの頭、腕、脚をもぎ取っていく。
女性――マリューの呟きが聞こえた。
「いったい、彼らは何者なの……？」

●

〔ったく、『欲張り』はよくねぇなぁ〕
通信を開きながら、デュオが言う。
「……、もう少し静かにやれ」
待ってました、と言わんばかりにデュオが返答する。

〔おいおい、俺はお前みたいに黙ってやる主義じゃねぇんだよ！！〕
「……」
〔お～～～～い、『エンジェル』？〕
「……」
〔あー、こちら『デス』、『エンジェル』どうぞ？〕
「……」
〔無視すんなァーッ！！〕
「うるさい、黙れ……」

ビームシザースを振り回しながら、通信機に怒鳴る。
器用なことにジンの頭や手足を奪い取っていく。

そして、

その光景を上空から眺めるジンとは異なる1機のＭＳ、『シグー』。

その中にいるパイロットは、金色の髪に怪しげな仮面を付けている。
「ほぅ、【死神】に【告死天使】か…。どうやら、あの情報が火消しの『ブリベンター』にも入っていたとはな…。
――ん？」

モニターに映る怪しげな動き。

灰色のＭＳにトレーラーが停まっている。
「あれが奪い損ねた最後の１機か…。――――――ッ……！！！？」

急に身体――いや、細胞が何かの存在を感じる。
「ほぅ、貴様も来ていたか？」
宿敵とも言ってもいい相手

「ムウ・ラ・フラガ…」

〔ラウ・ル・クルーゼッ！！〕

●

６機目の武装を破壊した時、不意に手元から警告のアラームが鳴り響く。

「……ッ！！」
〔あぁ？！まだいんのかよ！？〕
サブモニターに映っているのは１機のＭＡ（モビルアーマー）。

〔ありゃ、地球軍の…『メビウス』のカスタム機か…！？〕
オレンジ色にカラーリングさせた機体がシグーに攻撃を仕掛ける。
だが、シグーはひらりと避け銃を撃つ。

その先には――

「ッ！！…潰す気か？」
〔くそッ！間に合わねぇ！！〕
敵の狙いは、此方ではなく、最高の獲物だった…

●

女性が指示をしたトラックから降りながら、
「本当に、このトレーラーでいいんですか？」
サイの問いにマリューはうなずく。
「えぇ、間違いないわ。それじゃあ、指示した通りにストライカーパックに取り換えて」
トールが不思議そうな顔で
「『パワーパック』ってあのランチャーみたいなやつじゃないですよね？」
「パワーパックは元々ランチャーの中にあるわ。あの機体がランチャーを持つことでバッテリーを取り換えできるの」
そこまで説明すると僕の方を向き、

「やってくれるかしら？」
「……、わかりました。此処から脱出できるのなら…」
僕は機体に乗り込み、ＯＳを操作する。
そして、通信回線を開きながら、
「こちら、『Ｘ１０５ストライク』　地球軍　応答願います！
地球軍　応答願います！！」
しかし、返答はない…
再びＯＳを操作し機体に武器を装備させようとした時――

頭上で警告音が、うるさく鳴った。

「えっ…？！」
モニターを見ると遥か上空でザフト軍のＭＳと地球軍のＭＡが交戦していた。
ＭＳが発砲し、こちらに向かってくる。
「なっ！？冗談じゃないッ！！」
僕は急いで武器を装備させてフェイズシフトの電源をつける。
すると、灰色から白、青といったカラーリングに変わる。

その瞬間――

地鳴りのような爆発音がコロニー全域に轟く。

別の場所で爆発が起こったのだとすぐにわかった。

モニターを操作し、爆心地を探す。

工業地から、煙が尾の様に伸びているのが見えた。

その爆煙から出てきたのは――

白亜の戦艦だった……

第5話　巻き込まれた少年（後書き）

感想、お待ちしております。

第6話　アークエンジェル

爆発と共に現れた白亜の戦艦…

ふと、マリューの呟きが通信機から聞こえた。
〔アークエンジェル、来てくれたの？〕
その呟きから、あれを地球軍が造ったのだと理解する。

（地球軍はＭＳだけじゃなくあんな物まで造っていた…）

そう考えると背筋がゾッとした。

白亜の戦艦はザフト軍のＭＳ『シグー』に攻撃する。
だが、シグーはその攻撃さえもかわす。
戦艦が放った実弾はそのままコロニーの地面を、建物を、外壁をえぐる。
「ッ！！……『ヘリオポリス』が……」

●

「……あれか、」

〔みたいだな…、ようやく逢えたなぁ～『大天使』さんよぉ〕
デュオの口元が弧を描く。
〔どうするよぉ、キラの援護でもするか？〕
「いや、様子を見る……」
〔そうですかい、いざとなったら俺だけでも行くからな〕
「好きにしろ…」
通信機の向こうからデュオの文句が聞こえる。
俺たちがシグーと戦っても意味がない。
機動力、技術力、操縦力において差が開き過ぎている。
それにキラが乗る機体が装備するあのランチャー、何かある……

●

シグーは此方に銃口を向け撃つ。

素早く機体を操作し、回避させる。

巨大戦艦がこちらの援護のつもりか、ミサイルを発射する。

シグーは紙一重でそれを回避。

ミサイルはそのまま、コロニーの接続部分にぶつかる。

それにより、コロニー崩壊が進行する。
「ちょっ……、冗談じゃないッ！！」
僕は機体に装備させたランチャーを構える。

スコープを覗き、シグーをロックする。
〔待って！それは……〕
マリューの声が聞こえた気がした。
だが、迷わずにスイッチを押す。
途端に、まばゆい閃光が駆け巡る。
それはシグーの片腕では物足りず、コロニー外壁をも呑み込む。
「あぁっ……」

シグーは戦闘続行不可能と判断したのか、離脱する。
ほかのジンは既に瓦礫の山となっていた。
不意に通信が入る。
〔そこのＭＳ、応答しろっ！〕
聞いたことのない男の声だ。発信源はオレンジ色のＭＡからだった。
〔この声……、『ゼクス』なぜ貴様がここにいる！？火星の任務はどうしたッ！！〕
男の声を聞き、デュオが声を荒げる。
だが、男は
〔ちょっと待て、俺は地球軍第７軌道艦隊所属『ムウ・ラ・フラガ』大尉だっ！！『ゼクス』じゃねぇ！〕
〔そうか……、それは失礼した〕

ザフト艦
『ヴェサリウス』艦内――

〔おっ！４機目がきたか…〕
ジンとは系統が違う真紅の機体が着艦する。
それを操縦しているのはエリートを示す赤のパイロットスーツで身を包む少年だ。バイザー越しに見える瞳は緑色、蒼い髪が特徴的だ。
彼の脳裏には先程の少年の顔が過る。自分の名前を呼んだ彼が――
（何故、キラが『ヘリオポリス』に……？）
ＯＳを操作しながら彼、アスラン・ザラは思う。
幼い頃から共に育った、その彼がここに居る筈が無い。
だが、――

〔外装チェックと充電は終わりました〕
〔そちらはどうです？〕
整備班が聞いてくる。
「此方も終了した。しかし、よくこんなＯＳで……」
そう彼が言いかけた時、

〈クルーゼ隊長機帰還。被弾による損傷ありッ！！〉
そのアナウンスを聞いた者は驚きを隠せない。
〔隊長がッ？！〕
〔あり得ん…、こんなことが〕
〈消化班　救護班はただちにＢデッキへッ！！繰り返す、――〉
（あの隊長が…！？まさかナチュラルに？！）
アスランは先程の少年の顔を思い出す。
（でもアイツなら……）

●

「そんなッ！！隊長が被弾しただと？！」
銀髪の少年は先程のアナウンスを疑う。
「厄介な機体が残っちまったなぁ…」
褐色肌の少年は皮肉的に言う。
この場に居るのは5人。
その内の3人は赤服を着ている。
残りの2人はザフトの軍服ではなく普段着だ。
1人は漆黒の髪と瞳の少年。
もう1人少年は長い髪が顔の半分を覆っていることが特徴的である。
髪の長い少年が言う。
「残りの1機が敵にまわったということはラスティは失敗したか……」
「クッ！！傭兵ごときが口を突っ込むな！」
銀髪の少年が食って掛かる。
漆黒の髪の少年は構えながら
「ほぅ、やるか？」
「止めてくださいッ！！」
それまで黙っていた緑髪の少年が止める。
「いま僕たちが争う必要は無いです。イザーク、それに五飛さんも」
「ふんっ！！」
銀髪の少年――イザークは吐き捨てる様に言うと立ち去る。褐色肌の少年もついていく。
「すみません……」
「気にしてはいないぞ、ニコル」
髪が顔の半分を覆っている少年が言う。
ニコルと呼ばれた少年は
「ですが、五飛さんやトロワさんに当たる必要無かったのに……」

「今はそっとしてやれ…」

『ヘリオポリス』内――

白亜の戦艦（確か、マリューさんは【アークエンジェル】と呼んでいた）にストライクが着艦する。天使と悪魔の機体もそれに続く。
ストライクを操作し方膝を折り、両手をゆっくりと降ろす。
手のひらの上にいた者達は床に足をつける。
「ラミアス大尉ッ！！」
奥から大勢の人が来る。1人の女性が敬礼しながら、
「ご無事でなによりです。それとあの2機は……？」
マリューは言葉を濁す。
「それは……」

そんなやり取りをしている間に、僕はコックピットから降りる。
僕の姿を見た軍人のひとりが、
「おいおい、まだ子供じゃねぇか！？」
「ラミアス大尉、これは…？」
「……」

急に背中を叩かれ、僕は後ろを振り返る。
「よっ！！」

そこにはいつの間に、コックピットから降りたのか、ヒイロとデュオが立っていた。
ヒイロは僕の頭をわしわししながら、
「初めて乗ったにしてはいい出来だったぜ」

そこに、

「へぇ〜〜、コイツは驚いた」

聞いたこともない声が響いた。

声のする方を向くと、

そこには紫色のパイロットスーツで身を包んだ1人の男が居た…

番外編　その１（前書き）

過去の物語です

番外編　その１

夢を見る
それは、子供の頃の記憶
アスランと一緒に遊んでいた頃
あれはまだ、僕が６歳の時の――――――

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「キラァー！アスラン君が来てくれているわよ」
「ハァーイッ！！」
母さんの声に返事をして、僕は階段を駆け降りる。
「アスランッ！！」

「約束通りに来たぞ、キラ」

「どうする？外で遊ぶ、それとも中でゲームする？」
僕の質問にアスランは
「天気もいいし、外で遊ぶか」
「ＯＫ」
僕はサッカーボールを持ち、立ち上がる。
階段を降りながら
「いつものあの公園でいいよね？」
「あぁ」
母さんが聞いてくる。
「あら、キラとアスラン君、外で遊ぶの？」
「うん、いつものあの公園で！！」
「そう、気を付けてけね」
「ハァーイッ！！」
「分かりました」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ねぇ、アスラン」
僕は彼の名前を呼ぶ。
「なんだキラ？」
「なんでもない！」
アスランが頭を抱える。
「用がないなら呼ぶなよ」
「あはははははっ、ゴメン、ゴメン！！」
「ったく、お前なぁ～～、……ん――――？」
「アスラン、どうしたの？……あっ！！」

いつも人気の無いこの公園。
だが、今日は先客が居た。ひとり、ブランコに座っている。
「見かけない顔だな……、ってキラ！？」
隣にいるはずの人物は――――

「ねぇ、何してるの？」
見知らぬ少年に話しかけていた。
少年は顔を上げ、
「母さんを、待ってるんだ……」
「ふ～ん、あっ」
何か思い付いたようだ。
嫌な予感がする……
「それなら一緒に遊ぼうよッ！！」
やっぱり……（ガクッ

少年はキョトンッとした顔でキラを見ている。
まあ、それが普通の反応だ。
少年の手を引き、立ち上がらせる。
「僕はキラ、キラ・ヤマト。ヨロシクね♪あっちは友達の」
仕方なさそうに言う。
「アスラン、アスラン・ザラだ」

それから僕たち3人でサッカーをした。
彼はサッカーをしたことがないと、言っていたけれどすっごく上手で無経験とは思えない。
勿論、ゴールシュートもやった。僕はゴールキーパーをした。

彼がシュートする。

僕は必死にボールに手を伸ばす。

「とりゃあああああッ！！」

だが――――――

「おぉ、入った」

アスランは続けて

「情けないぞぉ、キラ！」

僕はボールは取れず、土の上に寝転んで居た。

「大丈夫？」

見上げると、彼が心配そうな顔で見ていた。

「へーキだよ！！」

そう言うと、彼の顔がほころぶ。

とてもキレイで見とれてしまいそうだった。

僕は立ち上がり、服についた土を払う。でも……

「ヤバい…落ちない」

あ～あ、帰ったら怒られるな…

「えっ？！」

彼の顔がさらに心配そうになる。

「まっ、いっか」

「どこがだよ…（汗）」

誰かの名前を呼ぶ声がした。
公園の入り口付近に女性が立っていた。
「母さんッ！！」
彼が駆け寄る。

「もう帰っちゃうんだ」
僕は手を振り、
「楽しかったよ、バイバーイッ！！」
彼はこちらを向き、手を振る。
そして、歩き出す。

「あっ！！」
「どうしたんだ、キラ？」
「名前、聞くの忘れた……」「あ……」

また会えるといいな

ダークブラウンの髪と
プルシアンブルーの瞳を持つ少年に……

番外編　その１（後書き）

ＦＴ１巻を読んで書きたくなった話です。
よかったら感想を書いていただけると嬉しいです。

第7話　男の正体（前書き）

原作より遅れています……（汗）

第7話　男の正体

その男は怪しげな笑いを浮かべながら近寄る。
「あなたは……？」
マリューが問う。
「俺？俺は地球軍第7軌道艦隊所属ムウ・ラ・フラガ大尉だ」
彼――――ムウは敬礼しながら言う。
それを返すようにマリューたちも敬礼する。
「第2宙域第5特務師団所属マリュー・ラミアス大尉です」
マリューに続き軍服の女性が
「同じくナタル・バジルールであります」

ムウは視線で誰かを探しながら
「乗艦許可をもらいたんだがね、この艦の責任者は？」
「艦長以下　艦の主立った士官は皆　先の攻撃で戦死されました…」
ナタルは目を伏せながら言う。
彼女の返答にマリューは驚きを隠せない。
「艦長がッ…？！」
「よって今は副長であるラミアス大尉がその任にあると思いますが」
続けて言うナタルの言葉にマリューは問う。
「他のメンバーは？」
彼女は首を横に振り、
「無事だったのは艦にいた下士官と十数名のみです…」
マリューは視線を落とす。
ムウはため息をつくと
「やれやれ　なんてこった…　ともかく許可をくれよラミアス大尉

なんせ俺の乗ってきた船も落とされちまってね…」
「あ　はい、許可いたします」
彼は後ろを向き、
「で、彼らは？」
「ご覧の通り、民間人です。襲撃を受けたとき何故か工場区にいて私が“G”に乗せました。名をキラ・ヤマトといいます」
「それじゃあ、あの二人は？」
彼の言う二人とはおそらくヒイロとデュオだろう…
「わかりません…、なぜ彼らが『あの機体』を持っているのか…」
「そうか…」
そう言うとキラたちに歩み寄る。
が、ヒイロとデュオがキラとムウの間に入り込む。
黒い服の少年、ヒイロが
「こいつは、驚いた。まさかあの【エンデミヨンの鷹】に会えるとはなぁ…」
「ふ～ん、俺のこと知ってんの？」
「あぁ、俺のいたスイーパーグループじゃあ、有名だぜぇ」
二人の視線がぶつかり合う。
急に、ムウの目付きが険しくなる。
「まさかとは思うがお前ら……
ガンダムパイロットか？
それにそこの坊主は
コーディネイターだろ？」

キラが口を開こうとした時、
「答える義務はないね」
ヒイロが憎たらしい顔でムウを挑発する。
だがムウも引き下がらない。
「それじゃあ、何でてめぇらは『消されたガンダム』に乗ってんだよ？」
「……」
ヒイロは黙りこむ。
「ヒイロ……？」
キラはそっとヒイロの顔をのぞき込む。
彼のコバルトブルーの瞳はムウを睨んでいた。
キラはムウの方を向いて、彼の問いに答えた。
「確かに僕はコーディネイターです」
ムウ達の後ろで、数人の兵士たちが銃を構える。
すぐさま、トールたちがキラを庇うように立ちふさがる。
「コーディネイターでもキラは敵（ザフト）じゃねぇよっ！！
さっきの見てなかったのか！？」
彼の言葉を聞いても兵士たちは銃を下ろそうとしない。
「銃を下ろしなさい」
マリューが短く命令する。
兵士たちはようやく銃を下ろす。

「ラミアス大尉…？」
「驚くこともないでしょ？此処は中立国のコロニーですもの」
キラは気付く、マリューが助け船を出していることに…
「戦火に巻き込まれるのが嫌で此処に移ったコーディネイターがいたとしても不思議じゃないわ、違う？キラくん」
「ええ、まあ…。僕は一世代目のコーディネイターですから…」
「つまり…、両親はナチュラルってことか…」
ムウが納得したように言う。
「いやぁ、悪かったな。本来アレに乗るはずだったパイロットたちが、必死で操縦していた動きと全く別物だったんでね」
そこまで黙って聞いていたヒイロが急に、
「あぁ、そうですとも、そうですとも。俺たちはガンダムパイロットだよ…」
「やはりな、で？　何で急に暴露したんだ？」
ムウの質問にヒイロは降参のように手を上げながら、
「キラが言いたくねぇことを言ったのに、こっちは黙るなんて好きじゃねぇんでね」
「ヒイロ……」
キラの呟きにヒイロは人懐っこい表情で言う。
「俺の本当の名前は『デュオ』、コロニーの【死神】デュオ・マックスウェルだ。ついでにこっちがヒイロ・ユイ」
ヒイロ――いや、デュオの言葉にトールが質問を投げ掛ける。
「なっ…、何で別の名前を名乗ってたんだよッ！？」
「あー…、まぁこっちにも色々と事情があんだよ…」
「その『事情』ってのは、あのプロジェクトのことだろ？」
ムウの言葉にデュオは嫌そうな顔で、
「ご名答、上から出された命令はあんたらが造った『G』の破壊だよ…」
「『上』って、あなたたちはザフトなの！？」
マリューの言葉に後ろの兵士たちが銃を構える。

「ザフトでも、ましては地球軍でもねぇ」
「では、何処の所属だッ！？」
ナタルが拳銃をデュオに突きつける。
が、マリューが止める。
「待って、ナタル」
「ラミアス大尉ッ！？」
ナタルが驚愕の目でマリューを見る。
「もし、彼らが本格的にそれを実行していれば、すでに『ストライク』は無き物よ」
「そんな馬鹿なッ！？相手は子供ですよッ！！」

ナタルにデュオが冷たく言い放つ。

「おいおい、世の中は戦争をしてんだぜ？

大人も子供も関係ねぇだろ？」

第7話　男の正体（後書き）

デュオのしゃべり方がおかしくなったような…

第8話　少年の気持ち（前書き）

今年はじめての投稿日が、自分の誕生日です。（笑）

第8話　少年の気持ち

ザフト艦

『ヴェサリウス』艦内――――――

「D装備ねぇ～」
ディアッカがガラス越しにMSデッキを見ながら言う。
五飛が装備されていく武器を見ながら、
「要塞攻略戦でもやるつもりか？」
「他に何が出来るんだ？」
イザークが逆に聞き返す。
会話を横で聞いていたトロワがニコルに声をかける。
「浮かない顔だな……」
ニコルは口を開く。
「こんな事をしたら、ヘリオポリスが……」
「しょうがないんじゃない？」
皮肉げな言葉はディアッカから聞こえた。
「自業自得だ、『中立』と言っておきながら、地球軍に手を貸したのだから…」
これを言ったイザークの顔からは、哀れみは1欠片も見えない。
トロワはそんな彼らに聞く。
「戦闘に参加しないのか？」
「ふん、地球軍の相手はミゲルとオロールたち、それと貴様らだけで物足りる」
鼻で笑いながらイザークが言う。
「そうか、ならその期待に応えねばな…」
そう言うと五飛は踵を返しトロワと共にパイロットルームを出る。

「『ブリベンター』同士の戦いか…　　これは見物だな…」
イザークが呟く。
先程、隊長から告げられた言葉。

「ブリベンターの【告死天使】と【死神】が地球軍にいる」

この作戦に何故『ブリベンター』とか言うナチュラルの集団が協力、
いや参加しているのか不思議であった。
やつらが手加減をするか、本気で殺り合うのか…
このような出来事、滅多に巡り会えないだろう…

アークエンジェル
艦内――――――

「お断りしますッ！！」
マリューさんに僕自身の意思を告げた。
確かに彼女の言っていることは正しい。
僕たちの住んでいる外の世界では戦争をしている。
でも――

「僕らは戦うのが嫌で此処、『ヘリオポリス』を選んだ！！」

マリューさんの隣に立つムウさんを見ながら、
「あのＭＳにはあなたが乗ればいいでしょう！？
僕たちをこれ以上巻き込まないでください！！」
「キラ君…」
マリューさんが僕の名を呼ぶ。
すると、今まで黙って聞いていたヒイロが口を開く。
「なら、お前は何もせずにそこに居ろ…」
「ヒイロッ？！」
隣にいたデュオが驚いたのがわかった。
そんなデュオを無視し、
「ザフトは俺たちが叩く。お前はただそこで見ていろ…」
「あっ、待てよヒイロッ！！」
それだけを言うとこの場を立ち去る。
「なんだよアイツ、偉そうに…」
トールがボソッと言う。
置いていかれたデュオがため息混じりに言う。
「お前の嫌いな戦いは俺たちがやるから、ＭＳには乗らなくていいって意味だ……多分」
そう言い残すとヒイロの後を追う。

不意に警報が鳴った。
マリューさんは素早く連絡を取る。「何があったのッ？！」
〔ラミアス大尉、フラガ大尉、至急ブリッジにッ！！ザフトのＭＳ隊が接近中です。指揮をお願いします！！〕
「何ですってッ？！フラガ大尉、艦長を…」
だが、彼女の言葉を遮り、
「いや、君が艦長だ！！」

「ですが、先任大尉はあなたの方が先では！？」
「確かにな、だが俺はこの艦のことを詳しく知らない」
「分かりました…」
マリューさんは頷く。
「では、アークエンジェル発進準備！総員第一戦闘配備！」
そこまで言うと、振り返りムウさんに問う。
「大尉のＭＡは！？」
「駄目だ、出られん！！」
「では、ＣＩＣをお願いします」
「了解だ　　先にブリッジに向かってくれ！！俺もすぐに行く！！」
「分かりました」マリューさんは急いでブリッジに向かう。
残ったムウさんは僕の方を向き、言った。

「お前が戦いたくないのはよく分かった。
でもなぁ、あのＭＳに乗ってこの艦を守れるのはお前だけなんだぞ…」

そう言い残すとマリューさんの後を追った。

僕の心には、彼の言った言葉と、戦いたくない気持ちが渦巻いていた。

第8話　少年の気持ち（後書き）

キラ）ねぇ、原作と違うけど、大丈夫なの……？

カルラ）全然、大丈夫じゃない…（―｜―；）

五飛）だから貴様は無能なのだ

カルラ）黙れ、ハゲ、ツルピカッ、デコ

五飛）俺は禿げとらん？

突然ですがアンケート

カルラ）突然ですが、アンケートを取りまーす

ヒイロ）今更か……？

デュオ）内容は【死亡フラグ】を折るか折らない
この２つだ！！

アスラン）原作では、そろそろミゲルが死ぬ頃だからな…

キラ）でも、何で急に？

カルラ）ミゲルが好きだからッ！！

ミゲル）嬉しいこと、言ってくれるじゃねぇか…

カルラ）『声』だけどね（笑）

ミゲル）何ィッ？！Σ（ ゜□゜；）

アスラン）確かに声の人は歌手だからなぁ…

デュオ）でもよぉ、死亡フラグを折ってもいいのかよ？

トロワ）世界観がスパロボだから問題ないだろう…

五飛）そのようなことも理解できんとは……、だから貴様は馬鹿なのだ

デュオ）おめぇら、どっからわいてきたッ！！？

五飛）俺は『ゴキ●リ』かッ！？

アスラン）来たか、ごひ

五飛）ウーフェイだ

ミゲル）ツッコミ役がいないと面白くないからな、よく来てくれた、ごひ

五飛）だからウーフェイだっ！！

スルーする人々

カルラ）死んだ人と言えば、バルフェル死んでないよね…

ヒイロ）アンドリュー・バルトフェルトのことか？

カルラ）そーそー

デュオ）登場はずいぶん先になるけどな…

カルラ）うっ……

キラ）カルラ、書くのが遅いもんね！

アスラン）１話が短すぎると知り合いにも言われたな

カルラ）バルフェルが死んだらどうなるんだろうね？

デュオ）逃げやがった、コイツ

トレーズ）彼が死んだら、私が代わりに出よう

・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

全員）（@|□|@;）！！

カルラ）出たぁーッ！！幽霊ッ！！

@≦≡±∋→▲&Å√∠　〜〜〜〜〜〜〜

ヒイロ）日本語喋れ、日本語を

トロワ）なるほど、中の人繋がりか…

デュオ）冷静に解析しとる場合か！？

五飛）ええええい、いい加減成仏しろトレーズッ！！

トレーズ）甘い、五飛

五飛）くっそおおおおぉぉぉぉぉぉっ！！

ミゲル）ごひの奴、どっかに走っていったな…

キラ）あっ！！カルラが気絶してる

ミゲル）幽霊系はムリだもんな……

アスラン）そろそろ終わるか

ヒイロ）アンケートの解答は感想のところで頼む

アスラン）ただし、アンケートの解答には返信しないぞ

デュオ）たくさんの解答、待ってるぜ！！

キラ）締め切りは１週間後の１月１５日

トレーズ）それでは諸君、また会おう

第9話　立ちはだかる仲間

機体の起動スイッチを立ち上げていると、ディスプレイにデュオが映る。

「何の用だ…」

〔いや、まさかお前が『あんなこと』を言うとは思わなかったんでな〕

さっきの事を思い出したのか、声を圧し殺して笑いはじめた。

俺は画面上で笑っている幸せそうな奴を睨んだ。

〔おいおい、睨むなよ…　　仏頂面がさらに酷くなるぞ……プッ〕

そして、再び笑う。

こいつ、後ろから撃ち落としてやろうか？

「集中しろ、デュオ……」

〔ヘエヘエ、わかってますよ。あんまりカリカリしてると、五飛みたいにデコから禿げていくぞ？〕

果たしてあれは禿げている分野に入るかは、置いておこう…

「すぐに行けるな…？」

〔誰に聞いてんだ？当たりめぇだろッ〕

奴の顔が怪しげな雰囲気を出す。

俺は頷き、バーニアを吹かす。

コロニー内には、再び攻めてきたジンと――――――

通信回線を通して、デュオの声が聞こえた。

〔嘘だろ……？！〕

俺はディスプレイに映るザフトのＭＳと共に飛行する『２機』の存在を受け入れることが出来なかった。

種別はガンダムタイプ――――

そこには、かつて【ＯＺ】を叩くため共に戦った仲間の機体があった。

片方のガンダムタイプのパイロットが通信回線を開いてきた。

ディスプレイによく知る者の顔が映る。

〔久し振りだな、ヒイロ・ユイ……〕

「五飛――――――」

アルトロンガンダムのパイロット、張五飛の姿がそこにあった。
おそらく、ガンダムヘビーアームズ改にはトロワが乗っているだろう…

〔おいおい、五飛　　ここ２０日間、姿を眩ましてなにやってたんだよ？〕

これを言ったデュオは人懐っこい笑顔を見せる。
だが、目が笑っていない…

〔フン、答える必要はない…〕

〔頭に来る言い方してくれるな、おい！！〕

「五飛、何故中立である『ヘリオポリス』内で、ザフト軍と共にいる？」

五飛の漆黒の瞳がこちらを見据える。

〔それはこちらの台詞だ…〕

「何……？！」

〔どーゆーことだ？〕

トロワが会話に入る。

〔何故お前たちは、『罪無きコロニー【ユニエスセブン】』に核を撃ち込んだ地球軍たちといるんだ？〕

〔あの艦の中には、戦争とは関係ねぇコロニーの住民がいるんでね、出来ればそこで見ていて欲しいんだけど…？〕

無論、あの五飛が何もしてこないとは限らない…

俺は、ひそかにグリップを握る。

モニター上で、アルトロンガンダムが《ツイン・ビーム・トライデント》を構える。

〔ヒイロ、貴様とはあの時の決着がついてなかったな？〕

〔ヘッ！！相変わらず過去の事をネチネチと言うなぁ？五飛！！〕

〔いくぞ、デュオ…　　手加減はしないぞ…〕

「五飛、トロワ、お前たちを……止めてみせる」

４機のガンダムが攻撃を仕掛ける。

今此処に、戦いの火蓋が切って落とされた。

第9話　立ちはだかる仲間（後書き）

アンケートは明日で締め切ります

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7696y/

ガンダムSEED 交わった世界

2012年1月14日14時50分発行